

先天性疾患が出産後の母親の心理的状态に与える影響

口唇裂・口蓋裂乳児の母親における抑うつ得点の2点間比較

松本 学¹・中條 哲²#・幸地省子³#・足立智昭⁴・遠藤利彦⁵

(¹ 共愛学園前橋国際大学国際社会学部・² 東北大学病院顎口腔機能治療部・³ 東北大学大学院歯学研究科・⁴ 宮城学院女子大学発達臨床学科・⁵ 東京大学大学院教育学研究科)

【問題・目的】口唇裂・口蓋裂 (CLCP) は顎顔面部の代表的先天性疾患であり、出生直後から形成外科・耳鼻科・小児科・歯科等の複数診療科による多面的治療を厳格な日程管理の下で行う必要がある (幸地、2004)。治療日程は厳密かつ多岐に及ぶため、両親や家族は自らの子どもが先天性疾患であることを理解し、医療職とのやりとりを通じて治療展望を得て心理的安定状態に至るまでに一定の時間を要することが予想される。足立・幸地 (2008) は母親の半数近くが生後 3 ヶ月頃の口唇裂初回手術までは、抑うつ状態になる可能性について報告している。一方、CLCP 児の両親・家族は、出生後しばらくの間は出生に伴う心理的ショック・授乳の難しさや乳児の成長への不安・通院の負担・治療等の多様なストレス下に置かれているが、従来我が国においては心理学的なアプローチの未発達な領域である。従って、この状況における心理的状态に関わる要因の特定は十分になされていないのが実情である。そこで本発表では、CLCP 児とその母親における生後 3 ヶ月・6 ヶ月の 2 点間における母親の心理的状态の変化について実態を明らかにするとともに、その影響要因について探ることを目的とする。

【方法】 対象: 東北地方の大学病院を受診した CLCP 乳児とその母親 20 組。方法: ① 母親の心理的状态の 2 時点の差の測定: BDI (日本版 Beck Depression Inventory-Second Edition; 小嶋・古川、2003) 及び Big Five 尺度 (和田、1996) を用いて測定を実施。② 母親の子ども表象に対する半構造化面接: Working Model of the Child Interview (WMCII; Zeanah, Benoit, Berton, Hirshberg, 1996) を実施。なお、今回は Zeanah et al. (1996) による分類を行わず、病気に関する項目の回答について考察の際に用いた。

【結果】 ①-1 母親の心理的状态の 2 点間差: 各尺度について Wilcoxon の順位和検定を行ったところ、2 点間の BDI 得点に有意差が見られた ($p=0.0257$, $p<.005$)。①-2 2 時点における各 BDI 得点・Big Five 5 因子の関係: 各因子間について Pearson の相関係数を調べたところ、3 ヶ月時における BDI 得点は、3 ヶ月時の外向性 ($r=-.426$, $p<.001$)・調和性 ($r=-.462$, $p<.001$)、6 ヶ月時の外向性 ($r=-.484$, $p<.05$) と負の相関が見られ、3 ヶ月時の情緒不安定性 ($r=.614$, $p<.001$)、6 ヶ月時の BDI 得点 ($r=.463$, $p<.05$) と正の相関が見られた。また、6 ヶ月時の BDI 得点は、3 ヶ月時の BDI 得点 ($r=.463$, $p<.05$)・6 ヶ月時の情緒不安定性 ($r=.595$, $p<.001$) と正の相関がみられ、6 ヶ月時の外向性 ($r=-.392$, $p<.05$)・調和性 ($r=-.382$, $p<.05$) と負の相関が見られた。以上から、①-1 生後 3 ヶ月と生後 6 ヶ月の 2 時点間では、6 ヶ月時の母親 BDI 得点が有意に低いことが見いだされた。①-2 各因子の相関から、3 ヶ月時 BDI 得点が 6 ヶ月時 BDI 得点と関連すること、2 時点間で BDI 得点と外向性・調和性・情緒不安定性といった母親の性格特性との相関が見られた。② 母親の半構造化面接の結果: 生後 3 ヶ月・6 ヶ月の 2 時点で CLCP についての母親の印象を尋ねたところ (WMCII における病気の項目)、3 ヶ月時点で多くの母親において初回手術についての不安が、6 ヶ月時点で初回手術を終えた安堵感とその当時の不安が報告された。

【考察】 母親の心理的状态について: 足立・幸地 (2008) が後方視的調査により示唆した初回手術前の母親の抑うつ得点の高さは、今回の前方視的調査結果でも生後 6 ヶ月時より生後 3 ヶ月時 (初回手術前) の BDI 得点が有意に高かったことによって支持された。また BDI 得点と Big Five 尺度の因子との相関は性格特性が各時点の心理状態を予測しうることを示唆している。このことから、1) 出産から生後 6 ヶ月以内の母親の心理的状态に注意を払う必要性とそのケアの重要性が改めて指摘できる。2) 母親の性格特性が生後半年の育児における母親の抑うつ傾向を予測する可能性があることを示唆する。3) WMCII の結果から、母親の心理的状态に生後 3 ヶ月頃に行われる口唇裂初回手術が強い影響を与えていることが考えられる。しかし、母親の心理的状态に影響する要因は初回手術などの治療的側面だけではなく通院、CLCP 重症度、母親・子ども特性、授乳等の育児法、夫婦関係や家族環境、社会経済的地位など様々なものが想定される。これらを踏まえ、効果的な母親支援のためには今後の詳細な分析が必要である。*付記: 本研究は平成 22-24 年度文部科学省科学研究費補助金 (若手研究 B 課題番号 22730022 研究代表者松本 学) の交付を受けている。